

マラキ書 3：19～24

ルカによる福音書 9：7～9

「いったい、何者だろう」

<伝道と弟子派遣のあと>

イエスさまは、各地で神の国の福音を宣べ伝えるために、伝道旅行をされました。十二人の選ばれた弟子たちは、イエスさまのお側に置かれ、語られる御言葉を聞き、また神の力によってなされる御業を目撃してきました。これは、十二人が後に派遣されるための、準備の期間でもありました。

そして、先週のところでは、この十二人がいよいよ「使徒」として、イエスさまによって神の力と権能を授かり、神の国を宣べ伝えるために、イエスさまによって実現する神さまの救いの知らせを伝えるために、各地へと派遣されたのです。

こうして、十二人の使徒によって、イエスさまの御言葉が宣べ伝えられ、イエスさまの力による癒しの御業が行われ、イエスさまの名は人々の間に知れ渡るようになりました。

そんな中で、このイエスさまのうわさが、ある人物の耳に入りました。それが、今日の登場人物、ガリラヤの地方を治めていた「領主ヘロデ」です。

<ヘロデと洗礼者ヨハネ>

ヘロデの名前は、以前、ルカによる福音書の3章19節に出てきていました。そこにはこうありました。「ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。」

時の権力者であった領主ヘロデは、洗礼者ヨハネに、兄弟の妻ヘロディアと結婚したことの罪を指摘され、そのことを理由に彼を牢に閉じ込めていたのです。

そして、今日の9節を見ると、ヘロデは、「ヨハネなら、わたしが首をはねた。」と言っています。洗礼者ヨハネは、この時点ですでにヘロデに処刑されていたのです。

この洗礼者ヨハネの処刑にまつわる詳細は、マルコによる福音書6章14～29節に語られています。そこには、ヘロデは、洗礼者ヨハネを捕らえておきながら、ヨハネを正しい聖なる人として恐れており、その教えを当惑しながらも、喜んで聞いていた、とあります。一方で妻のヘロディアは、ヨハネを殺したいと思っていました。そんな時、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が踊りを踊り、ヘロデや客をととても喜ばせたのです。気をよくした領主ヘロデは、この娘に「何でも与えよう、国の半分でもあげよう」と約束してしまいました。そこで、妻のヘロディアは娘に入れ知恵し、洗礼者ヨハネの首を盆に載せていただきたい、と求めさせたのです。ヘロデは大勢の客の面前で約束した手前、心を痛めながらも、自分の心も偽っ

て、ヨハネを処刑したのです。これは、「サロメ」という戯曲でもよく知られています。あとでこのマルコ福音書の箇所をそれぞれ読んで下されればよいと思います。

#### <人々のうわさ>

さて、この領主ヘロデは「これらの出来事をすべて聞いて戸惑った」とあります。

ヘロデのもとには、イエスさまが語られた神の国、イエスさまの力によってなされた御業が伝えられると共に、この力ある御言葉を語り、神の御業をするイエスという人はいったい何者なのだろう、という人々の憶測も一緒に飛び込んできました。

ある人は、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」言いました。ある人は「エリヤが現れたのだ」と言いました。ある人は「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言いました。

とりわけヘロデが戸惑ったのは、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。」と人々が言ったことでしょう。イエスさまの教えや、なされた御業を見た、多くの人々は、イエスさまに洗礼者ヨハネとの関連性、連続性を感じ取ったのです。

洗礼者ヨハネは、イエスさまより半年ほど早く生まれ、主の道備えをする者として、旧約聖書の時代から預言されていた、神さまに選ばれた人物でした。その預言が、今日読んでいただいたマラキ書です。今日は「預言者エリヤ」の名前が出て来る 19～24 節だけを読んでもいただきました。「見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。」少し遡ると、マラキ書 3 章 1 節にはこう書かれています。「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。」

このマラキ書に記された預言者エリヤの再来こそ、洗礼者ヨハネなのだ、とルカは語っています。ヨハネは、神さまが救いの御業を実現するために、救い主を遣わされる。イエスさまこそ、その方である。そう言って、神さまの御心から離れている人々に呼びかけ、神さまのもとに立ち帰り、罪を赦して頂きなさいと語って、人々に洗礼を授けました。そうして、救い主であるイエスさまが来られるための道備えをし、人々に主を迎える準備をさせたのです。

神の御心を語り、預言に従ってイエスさまを指し示したヨハネと、自ら神の言葉を語られるイエスさま。人々が連続性を感じ取ったのは当然のことだったかも知れません。

それで人々は、イエスさまのことを、この洗礼者ヨハネが生き返った者だ、と言ったり、預言されているエリヤだ、と言ったりしました。

しかし、イエスさまは、預言者エリヤとして主の道を備える役割を担い、遣わされた洗礼者ヨハネが、この方こそ主である、救い主である、と指し示した方なのです。

また、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」というのは、旧約聖書の預言者のことです。神の言葉を預かり、民に裁きと救いを告げる預言者が現れたのだと、人々は感じたのです。

いずれにしても、うわさをしている者たちの中では、イエスさまは、洗礼者ヨハネと関連があり、また神さまの預言者には違いないと思われていましたが、結局よく分かりませんでした。それで、イエスという人はいったい、何者だろう。どなたなのだろう。人々は、あれやこれやと想像を巡らせ、推測して語り合っていたのです。

<会ってみたい>

ヘロデは、そんな風にうわさされるイエスさまに、会ってみたいと思いました。

もし、自分が首をはねたヨハネが生き返ったんだったら、それはとても恐ろしいことでしょう。会ってしまったら、恨みつらみでも言われそうです。

でも、ヘロデは「戸惑った」とあります。そんなはずはない。死んだヨハネではない。でも、彼と関係がありそう。ヘロデはむしろ関心を抱きました。イエスさまが語っておられること、なされた癒しの御業。こんなに人々が注目し、語り合うような人物は、いったい、何者だろう。そんな問いと、関心を抱いたのです。もしかすると、ヨハネの教えを聞いた時の喜びが、胸をよぎったかも知れません。

最後の一節には、ヘロデが「イエスに会ってみたいと思った」とありますが、これは、芸能人に会ってみたい、うわさの人物に会ってみたい、というような、ミーハーな思いを表現する言葉ではありません。

この「会ってみたい」と訳されているギリシア語は、直訳すると「イエスを見ることを求めた」となります。この「見る」は、一目見る、というようなことではなくて、深く知ることの意味です。ヘロデは、こんなにうわさされているイエスが、どんな顔か一目見てみたい、というのではなくて、このイエスに、出会う、何者であるかを知って、関わりたいと望んだのです。「いったい、何者だろう。」これは、強い関心を持った問いなのです。

<いったい、何者だろう>

そしてこれは、わたしたちが持つ問いでもあります。人生の中で耳にする、イエスさまという方。キリスト教の重要人物。神なのか。人なのか。救い主とはどういうことか。教会に行けば礼拝でいつも語られている、イエスさまという方。

イエスとは、いったい、何者だろう。これはイエスさまの名を耳にしたすべての人間が持つ、根本的な問いなのです。

しかも、この問いを持つのは、ヘロデのように、話には聞いているけれども、まだイエスさまのことをよく知らない、という求道者の方のことだけではありません。

すでにイエスさまと出会い、従っている弟子たち、そしてすでに教会の信徒となっている者もまた、イエスさまの側にいながら、「いったい、この方はどなたなのだろう」との問いを繰り返しているのです。

聖書でも、みんながこの問いを抱いています。

ルカによる福音書では、7章49節で、イエスさまの足に香油を注いだ女に対して、イエスさまが「あなたの罪は赦された」と言われた時、同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた、とありました。

8章25節では、風と荒波をお叱りになって静ませたイエスさまに対して、弟子たちが「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と言いました。

そして今日は領主ヘロデが「いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は」と問いました。

皆がイエスさまに問いを持ちます。この方が何者かを知りたいと思っています。

しかし実は、最終的には、この問いによって、わたしたち自身が問われることとなります。少し後ですが、9章20節で、イエスさまがペトロにこう尋ねられます。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」あなたは、わたしをどう受け止めるのか。あなたにとって、イエスとは何者なのか。そう問い返されるのです。

#### <イエスさまを知ること>

聖書はずっと、イエスさまが神の御子であること、救い主であることを語っています。イエスさまは、ご自分が神の国、神のご支配を実現し、人を罪から救うために来られたことを、語り続けておられます。

しかし、弟子たちも、わたしたちも、聞いてすぐにそのことが理解でき、イエスさまがどなたかを知ることが出来る訳ではありません。どうやって知っていくかというと、日々、イエスさまの御許で御言葉を聞き続ける中で、イエスさまの歩みに従っていく中で、わたしたちははじめてこの方がどなたかを、だんだん知っていくことが出来るのです。

わたしたちは、イエスさまが会って下さり、わたしに語って下さる御言葉を、わたしの人生に関わって下さることを、まず受け入れなければなりません。そして、この方と共に歩むようになる中で、この方が本当に神の御子であること、この方が、本当にわたしの救い主であることを深く知っていくことが出来るのです。

もし、イエスさまを受け入れないで、外から見て、話を聞くだけで、距離を取って、遠くからこの人がどんな人か知りたいと思っても、それでは決して知ることは出来ません。語りかけて下さり、ご自分の許へ招いて下さるこの方を受け入れないなら、関わりを拒むなら、この方を本当に知ることは出来ないのです。

イエスさまの御言葉を聞き、差し伸べられた手を握り返し、交わりが与えられていく中で、この方がどういう方かを本当に知っていくことが出来るのです。

そしてそれこそ、信仰の歩みです。信仰は、頭の中の知恵や知識ではありません。それに、何もかも頭で理解して、イエスさまが誰かを見極めてから、イエスさまと関わるのではありません。この方はわたしたちが究めることの出来ないお方なのです。ですからまず、関わってきて下さったイエスさまを信じて受け入れ、この方と共に、この方によって生きていくこ

とで、この方がどなたかを体験し、本当にこの方が救い主であることを知っていくのです。それが信仰の歩みなのです。

ですから、イエスさまを知りたいと願いながらも、イエスさまに従うことのなかったヘロデは、最後までイエスさまを知ることは出来ませんでした。

ルカによる福音書の 23 章 6 節以下に、イエスさまが逮捕されて、総督ピラトのもとで裁判を受けた後、ヘロデのもとに送られる場面があります。そこには「彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのはイエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行なうのを見たいと望んでいたからである」とあります。しかし、いろいろと尋問しても、イエスさまは何もお答えになりませんでした。それで、ヘロデはイエスさまをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した、ということです。ヘロデは、イエスさまを知ることは出来ませんでした。

しかし、イエスさまとの交わりの内に歩いていくなら、その歩みの中で、神の御言葉が語られ、神の御業がなされるのを目撃し、この方がどういう方なのかを知らされていくのです。一方で、知れば知るほど、問いは深くなってもいくでしょう。神の御子とはどういう方か。何をして下さったのか。わたしたちをどういう目で見つめておられるのか。知れば知るほど、イエスさまが示された神の愛の深さに、神の力の偉大さに、圧倒されていくでしょう。

そしてイエスさまを知るならば、同時にわたしたちは、自分自身のことも知るようになります。神の御子がなぜ、まことの人となられたか。神の御子が、なぜ十字架という屈辱に満ちた刑で死ななければならなかったか。なぜ、この方は死者の中から復活させられたのか。そうしてだれの救い主となられたのか。

それは、わたしたちのためなのです。わたしのためなのです。イエスさまの愛の深さを知る時、わたしたちは自分の罪深さを知らされます。イエスさまの憐れみを知る時、わたしたちは自分の冷酷さを知らされます。イエスさまが新しい命を与えて下さる方だと知る時、わたしたちは、この方がいなければ生きられない者なのだ知らされます。

そして、イエスさまを知る時、わたしたちは、初めからこの方に自分が知られていた、ということを知るのです。

そして、イエスさまとの交わりの中で、恵みの中で、わたしたちはすべてをご存知の主が、わたしを見出し、捕らえ、罪の赦しを与えて下さったことを知るのです。そして、ますます信じる者へと、ますます神さまに依り頼む者へと、新しく変えられていくのです。

わたしたちは繰り返し、「この方はいったい、何者だろう」と問います。その度に、わたしたちは問い返されます。「あなたは、わたしを何者だと言うのか。」

わたしたちは、聖書を通して、礼拝を通して、祈りを通して、イエスさまと共に歩む中で、この方こそ、わたしたちの罪を赦すために来られた、神の御子、わたしたちの、わたしの救い主であると、知らされています。そして、あなたは、まことにわたしの救い主です、と告

白する者へ変えられていくのです。

しかし、それで終わりではありません。わたしたちは終わりの日まで、この方を知り尽くすことは出来ません。わたしたちの知識をはるかに超える、イエスさまの愛の広さ、長さ、高さ、深さを味わいつつ、満たされつつ、いつも新たにこの方を知らされつつ、歩いていくのです。

今日は聖餐にあずかります。イエスさまとわたしたちが交わりにあずかり、一つにされていることを、十字架の血によって罪の赦しにあずかっている恵みを、パンと杯のしるしを通して、体全体で受け取る時です。今日また深く、新しく、わたしたちはイエスさまと交わり、イエスさまの恵みを目撃し、イエスさまを知ることが出来ます。

そしてまた、一人でも多くの方が、イエスさまの関わりを受け入れ、この方がわたしの救い主であると知り、信仰を告白することが出来ますように。この恵みの食卓に共に与り、ますます恵み深さを味わい知る者となることが出来ますようにと祈ります。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

何も知らず、何も分からないわたしたちに、イエスさまが会って下さり、御言葉を下さり、共に歩いて下さり、ご自分がどなたかを知らせて下さり、「あなたはわたしの救い主です」と告白する信仰を与えて下さったことを、感謝いたします。

イエスさまは、わたしたちが知り尽くすことが出来ないお方です。しかし、わたしたちは受けた恵みによって、イエスさまが神の御子であり、わたしたちの救い主であることを信じます。イエスさまを「わたしの救い主と」、あなたのことを「わたしの父なる神」と答えることが許されている恵みを感謝します。

どうか、ますますあなたの恵み深さを、イエスさまの愛を知っていくことが出来ますように、わたしたちを聖霊によって新しくし、導き、従う者とならせて下さい。

今日の聖餐の恵みに感謝いたします。天におられる復活の主と、確かな交わりにあずかっていること、罪の赦しをいただいていることを、この恵みの手段を通して、ますます確かに知ることが出来ますように。

そして、一人でも多くの方が、イエスさまが救い主であることを信じ、イエスさまに従って生きる、イエスさまの愛に支えられて生きる幸いに与り、この食卓を共に出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン